2023/10/10　七名バージョン

しょうりゅうでんせつ

『昇龍伝説』（天に昇った男のものがたり）　第六稿　②

岡安伸治

登場人物（ホームレスたち　七名）

ロッキー（村男三　船乗り三　商人一　石工一　警官　善助七　鯉七⑦　玄新　使用人一　村人⑥）

けんた（村男一　船乗り一　使用人五　秀次　兵士一　若い僧　善助六　鯉七⑥　宮廷医①　民三）

みさと（善助一　鯉　鯉七①　使用人三　商人三　医師　上官　姫帝）

てつ（村男二　秀治　船乗り二　使用人四　商人二　兵士二　善助五　鯉七⑤　村人④　兵士①　宮廷医②　民四）

あやね（カラス　村女二　善助二　鯉七②　石工二　僧一　村人③　兵士②　民三）

ハルミ（つね　大商人　善助③　鯉七③　看護師　老僧　レンガ工　村人②　民二）

なつき（村女一　使用人二　商人四　僧二　王　村人①　善助四　鯉七④）

舞台中央に、ぜんちゃんが身に着けていたコートや帽子などが掛かる簡単な手作りのハンガースタンド。焚火の炎にあおられて、ホームレスたちが軽いのりで楽しそうに踊りながら歌う。

俺たちみんな　宿無しホームレス
寝床もなければ　仕事もない
ネオン瞬く　都会の片隅で
体を丸めて　耐えるのさ

財布は空っけつ　腹も空っぽ
家もなければ　家族もない

美形のぜんちゃん　寡黙のぜんちゃん
ぜんちゃんの　夢もの語り
美形のぜんちゃん　カラオケぜんちゃん
ぜんちゃんの　夢もの語り

河原の水音。

ロッキー　中学生らしき悪ガキどもの投げた火炎瓶で、火だるまになったぜんちゃん、みんなで火を消し止め、仲間が呼んだ救急車で運ばれた。でもよホームレスってことで病院で受け付けてもらえず七か所の病院をたらいまわし。七か所目の病院を断られたときは、もう持たなかった。息を引き取っちまった。こうやって弔いに集まったのは、その救急車の中で、か細い声で「わるいね、迷惑かけちゃうね」と繰り返し、付き添いで乗った仲間に気を使いながら七か所の病院から病院へと運ばれる間にぜんちゃんの見た、七つの物語り。

けんた　カラオケ好きだった、ぜんちゃんの為に楽しく弔ってやろうや。

ロッキー　（ぜんちゃんのコートのポケットより手帳を取り出し）自分のことを何も語らなかった寡黙のぜんちゃん。残っていた遺品の手帳に細かくこれまでのぜんちゃんの過去がその断片が記されていた。
本名、福田善助。世界恐慌で不況の一九三五年、三人兄弟の末っ子として旧満州の開拓村に生まれる。父を亡くした年に

終戦。
ぜんちゃん一〇才。年子の兄二人とぜんちゃんは元旅芸人であった母ハツエとともに開拓村を捨て、旧満州の在留邦人一七〇万の一人としてロシア兵に追われ日本に向かった。

善助一　かあちゃーん！

ロシア兵の群れが襲い掛かる

ロシア兵　（ロシア民謡「カチューシャ」原語にて・軍隊行進風・タップ）

善助一　（襲い掛かる群れの中を逃げ回る）かあちゃーん！

ロッキー　途中、母のハツエは三人の子を大陸に、河原の葦の中に置きざりにして失踪、行方不明となる。

てつ　男ができた。

ロッキー　そんな子供のころおっかさんに捨てられた美形のぜんちゃん一つ目の病院を断られたときに、語った一つ目の物語。

善助一　鯉がな。鯉が人間になるんだ。そして旅に出るんだ。

けんた　惚れた腫れたの恋でなく、水の中の魚の鯉が旅に出る話だ。

善助一が鯉に

鯉　あるところに一匹の鯉が、天を自由に泳ぐ龍になることを夢見てていた。

カラス　おう、どうした？　ため息ばかりついて。

鯉　カラスのあんたのように、あんなに大きな雲やらが流れていく大空を自由に飛べたらなと思ってよ。

カラス　そりゃあ。無理というものだ。魚だからな。魚はこの水があっての魚ってことだ。でもな、なんでも水の流れの落ちる大きな滝を上っていくと、その勢いでそのまま大空へ上って龍に姿を変えるんだとさ。

鯉　ええっ！　おいらと同じ鯉が？　鯉が大空へ上ることができるのかい？

カラス　大きな滝を上ることができるのは、まあ鯉ぐらいのものだ。鮎の奴も滝を上るそうだが、勢いというか馬力が今一つ。

鯉　大きな滝か、キラキラ光る水の上を龍になって空を飛べるんだ。龍になって飛べる。

カラス　そうよ、天の神様に頼んでみるかい。龍になって空を飛べますようにって。

鯉　そうだよな。うん！
カラス　おい！
鯉　おいらはそんな思いを毎日、水の中から空を見上げて[illegible]神さまに
祈った。どうかこの鯉のおいらを龍に変えて、空を泳げるように
してください。
村男一　そんな姿を見て面白がった神様が、ある貧しい水飲み百姓の
つねという女にはらませた。
つね　（大きな腹を抱えて）あれーどうすべー、身ごもってしまった。
村男一　つねの体の腹が。
つね　あっという間の臨月、もう生まれる。産婆さんさ呼んで、誰か！

鯉が鯉七に　赤子の声
丸く円陣の村の女たちが大数珠を順送りにしながら読経。

村女一　独り者のつねが身ごもった。
村女二　ふしだらによ。村の面汚し。
村女一　七夕に鯉が跳ねるのを見た日に身ごもったので、鯉と七夕の
七の字で鯉七と名付けた。
村女二　どうせ馬小屋で人知れずに産み落としたんだ。
村男一　おかげでつねは一人身で身ごもったと村八分。
村女一　口をきいてはなんね。目を合わせてはなんね。
村女二　寄合に呼ぶんでねえ。
村女一　祭りの声かけもなんね。
村男一　そんなある日、大きく育った鯉七が大病をして、寝込んでしまう。
つね　お願いでございます。お願いでございます。お願いでございます。

村人ら無視。

鯉七①　おっ母、寒くてしょうがねえ。もっと布団をかけてくれ。
村女一　金のないものは神様に祈ることで治すしかねえ。
つね　お願いでございます。せがれの鯉七。大熱が出て唇を震わせ
寝込んでおります。鯉七の命が助かるなら私の命を差し上げ
ます。どうかせがれの命を救ってやってくださいませ。どう

村女二　かお願いでございます。
村男一　金のないものに限って厄介ごとを背負い込む。
仕方なく小屋の中に紛れ込んだやせたニワトリをひねって、肉の塊を胸に押し当てた。それが効いたと見えて鯉七は回復し、数日のうちに治った。
村女一　（コッコッコとニワトリを追って）うちのニワトリがどこぞに消えてしまった。

つねがフラフラと倒れ込む

村男一　それから数日おいて今度はつねが頭が痛いといって倒れ、体が不自由になり寝たきり。
村女一　やっぱり不幸はびんぼう人ばかりたかる。
村女二　（村女一に）野良犬のえじきじゃねえのか。

荷車の音

鯉七①　おっかあ、荷車借りてきた。これで峠一つ越えて医者さまに診てもらいに行くべ。安心してくれおっかあ。
村女一　子供だ、金の力が分からねえ。
村女二□　貧乏はしたものでないとわからねえ。
鯉七①　北風に吹かれながら峠道を一人で荷車におっかあを乗せ、遠く離れた医者に。どうぞ診て下せ。

医者の家

村女二　じぇんこは？
村女一　じぇんこ？
村男一　カネのない悲しさ。満足に診てもらえず、追い返された。
村男二　貧乏人になんかなるもんじゃねえ。
村男一　帰り道、つねは鯉七の手を動く方の左手で強く握り。
村男二　何か言ったのか？
つね　鯉七、お医者さまとの出会いにも運不運というものがあるんだ。
村女一　どこにでも運不運はある。
村女八　で？
つね　いいお医者さまに当たれば死ぬ人も生き返るし、悪いのに当たると生きる人も死んでしまう。
村女一　道理だ真だ。

つね　私は正直な神さまに出会っただけ。
村女二　どこまでもお人よしだ。
村男一　だから貧乏人はダメなんだ。
村男二　で、鯉七は？
鯉七①　おっかあ。前からかんがえていたんだがよ、この貧乏から逃れるには坊さまになるしかねえと思うんだ。
村女一　あれっ。
村女二　ほお…
鯉七①　坊さまになれば軒先でお経をすれば、食い物をもらえるしうまくいけば家にも泊めてもらえる。
村女二　間違えねえ。
鯉七①　大勢の人がありがたいと言って手を合わせてくれる。
村女一　これも道理だ。
鯉七①　だれも石など投げつけたりしない。あったかい布団にも眠れる。
村女一　んだな、でつねは？
つね　お前、そんなことを。
村男二　感心したものやらなんて言っていいやら。
鯉七①　村の衆が話してた。
村女一　誰だや？
鯉七①　こんなやせた土地で財産も何もない貧乏人が。
村女二　大きなお世話だ。
鯉七①　世に出る方法は坊さまになるしかないって。
村女一　そんなことしゃべったって、どいつだ？
村男一　と、口にしたものの孝行者の鯉七にはそれができるか？
村男二　やっぱりな。
村女二　そりゃそうだ。
鯉七①　寝たきりのおっかさんを置いて坊さまになるために家を出ることなどできない。
村女一　それが人間だ。

川の水音
老女たちがつねを見つめる。

つね　この世に生まれて自分のやりたいことができないと我慢するのが一番いけない。勉強をして立派な坊さまになるならそれもよし。自分のやりたいことをおやり。
鯉七①　えっ？
つね　私に何かあったら、遠い親戚の船乗りのおじさんを尋ねるん

だよ。

村女一　あれ、どこさいぐ？

つねが不自由な体を引きずり川のそば。
老女たちが離れながら後を追う。「川へ行くぞ川へ」

村女二　おっかあはいつもつれえもんだ。
つね　なんと恐ろしい、私があの子の生き方のじゃまになっていたとは…。
村女二　つれえよ。

つねが手を合わせ川に身を投げる。水の音
流れる水音

鯉七①　おっかあー！
村男三　あくる日、こと切れたつねが川の橋げたに引っかかっているのが見つかり。身を投げたと思われる川のふちに、擦り切れた草履がきちんと揃えられ。
鯉七①　おっかあー！
村男一　土まんじゅうの下に弔って。
村男三　鯉七、われは誰に断って荷車をつこうとんじゃ！
村男二　くそ曲がりの根性を叩きなおしてやれ！
村男一　村からたたき出せ！

鯉七が叩きのめされる

村男三　村の衆が鯉七が勝手に人さまの荷車を使ったと。村人らにのしられ、鯉七は悲しみを引きずり涙ながら自分の生まれ育った土地を離れ、りっぱな坊さまになるため、船乗りのおじさんを尋ね。この島国日本を旅立ち、船乗りの使い走りの手伝いをしながら海を越え遠く天竺の地へと向かう。

風が吹き抜ける

てつ　で？
けんた　ここまでがぜんちゃんが語った一つ目のはなしだ。
てつ　なら満州を逃げ回ったぜんちゃんは？
ロッキー　（手帳を手に）満州に置き去りにされた兄弟三人は物乞いをして広い満州の大地を歩き旅を続ける。途中、兄弟の中で一

番愛くるしいぜんちゃん一人が金持ちの中国人に引き取られた。そこで別れた兄たち二人はなんとか日本へ。やっと父親の実家、博多にたどり着く。広島、長崎に原爆が落とされた次の年であった。

中国人に引き取られた美形のぜんちゃん。まだ見ぬ日本を思い、自分のおとぎ話にひたつては独りぼっちのさびしさをまぎらわした。それから十九年後の一九六四年、ぜんちゃん二八歳で残留孤児引き揚げ船でやっと　帰国。実家、九州の長男の秀治のところに身を寄せる。もう一人の次男の兄、秀次はその一年前に筑豊の炭鉱で炭塵爆破による落盤事故にあい亡くなっていた。その頃巷のはやり歌は「無法松の一生」。

善助二　（歌・「無法松の一生」三番）

ロッキー　二つ目の病院も断られ。するとぜんちゃんが。

善助二　石っころさ。そこいらに転がってる石っころなんぞ、誰も見向きもしねえよ。

ロッキー　と、石っころの話を始めた。ぜんちゃんの鯉七話、二つ目の話だ。おっ母の思いを背にした鯉七は、この島国日本を旅立ち、船乗りの手伝いをしながら海を越え遠く天竺の地へと向かう。

海の波風

鯉七②　航海の長い日々、おいらは船乗りたちの話に聞き入った。

船乗り一　潮目と風を読むことができれば一人前だ。

船乗り二三　おう！

船乗り一　でな人間の心はタコの田く墨と同じ黒いところと、イカの身のように白いところがそれぞれ分かれて一つになってあるんだと。

船乗り二三　へえー。

船乗り一　だから人間の心は、あるときには黒いところが白に勝って大きくなると極悪非道、人殺しでさえなんとも思わない人間になり。白いところが大きくなると大悪人と言われていた者でも幼い子供の命を助け、年寄を負ぶって津波から逃れるようなことをするのだそうだ。

船乗り二　そうなんだ。

船乗り一　おい、こっちの方へもっと帆綱を引け。鯉七は坊さまの勉強をするって立派な覚悟だ。

船乗り三　俺たちとは偉い違いだ。
船乗り一　えらい坊さまというのは、いのりながら高い絶壁から身を投げ出し、死をも恐れないという覚悟でないと悟ることができないといわれているぞ。でもな、わからないのは飛び降りて悟ったとしよう。そのあとどうする。
船乗り三　命はないものな。
船乗り二　知りてえな。
鯉七②　命まで。
船乗り一　おおよ、手を合わせるにも「ごたいとうち」とかいうのがあって、地面に全身を投げ出し必死に祈るらしい。そんなことを繰り返して高い山をいくつも超えて、遠い天竺まで行くのも悟りを開くためだとさ。
鯉七②　一回で人の丈しか進めないのですか？
船乗り一　それも中国の都、長安から五万余里、八千三百三十三里十二町だとよ。
鯉七②　へえー…そんなに。
船乗り一　ほらっ！　手を緩めるじゃねえ。今だ、たぐれたぐれ！

舳をたたきつける波と帆を打つ風の音

使用人一　大陸の港に着き鯉七が船を降りると、船乗りがその港のある大商人のところへ連れて行った。
使用人二　商人（あきんど）の方が鯉七の為になると考えてのことだ。
使用人三　でも話はそうは簡単にはいくものか。
使用人一　使用人にほうきでたたき出された。
使用人四　断られても断られてもその船乗りは地面に手を着き、この子を立派な商人にしてくれと頭を下げる。
船乗り一　これ鯉七、もっと頭を下げてお願いもうせ。
鯉七②　お願いいたします。
使用人四　お前さんがこの子に商才があると思うなら、自分で商人にしたらよかろう。
船乗り一　そんなことをおっしゃらずに、お願いいたします。どうぞ旦那さまにお取次ぎを願います。なにとぞ…
使用人四　二人はどうしてもと店の前を動かない。数日そのままほっておかれたが、何とも動かないので、仕方なくあるじが二人に会った。
大商人　坊主、いい目をしているな。
船乗り一　坊さまになりたいと海を渡ってまいりました。ですが世間が分からぬ子供のこと。人間食べていかなければなりません。

坊さんよりあきんどの道をと思いまして、無理を承知のお願いでございます。

使用人四　だんなはそこいらに転がる石ころを一つ手にして、鯉七に。

使用人二　石ころ？

大商人　そうか。なら、ぼうず、この石を市場に行って売ってこい。やれるか。

鯉七②　はい。

使用人二　売れるのか？

使用人四　そこいらに転がる石ころだもんな。

鯉七は走って市場へ
騒がしくにぎやかな大きな市場

鯉七②　この石を買うてくれ。だれかこの石を買うとくれ。この石を。
（市場の端から端まで売り歩く）

商人一　ぼうずいつまでもうろうろしてねえでけえりな。

商人二　日が暮れるぞ。

店がたたまれていく
トボトボ引き返す鯉七

鯉七②　戻りました。

船乗り一　こんな遅くまでかかっても売れなかったか…　おお、涙の後が砂ほこりで…　旦那さまにご報告申せ。

鯉七②　誰も買ってくれませんでした。

大商人　だろうな。もう遅い、小屋で飯でも食って休め。で、明日はこれを市場で売って来い。（一つの石を取り出す）。

使用人四　引き出しからきれいな石を取り出し鯉七に渡した。そして次の日。

再び騒がしくにぎやかな大市場

鯉七②　この石を買うてくれ。だれかこの石を。どなたか…

商人一　（笑いながら近づき）ぼうず、なにを売ってる。ちょっと見せてみろ。…よし、俺が銅貨一枚で買うてやる。

商人二　おおー、こっちのおじさんもちょっと見せてもらおうか。はーなるほどな、おじさんは銀貨一枚で買うてやる。

商人一　わきから余計な口出しすんじゃねえ。

商人二　なんだと。

二人の商売人はつかみ合いの大喧嘩

商人三　どれ、こっちに見せな。…これならわしが金貨一枚で買う。
鯉七②　じゃ金貨一枚で。ありがとうございます。
商人二　（商人三に）この野郎！
商人一　きたねえことするな！

鯉七が大商人のところに戻る

鯉七②　ただいま戻りました。
大商人　どうだ売れたか。
鯉七②　金貨一枚であっという間に売れました。これがその金貨です。それが二人の男の人がつかみ合いのけんかをするほど欲しがって大変でした。もっとあればもっと売れたかもしれません。きっと金貨二枚でも売れたかもしれません。
大商人　いいか、どこにでもあってすぐに手に入るものは誰も買わん。簡単に手にいらないから高く売れる。金が全てではない。だがな金は人の心を変えるほどの力を持っている。時として国をも動かす力を持ってる。決してあなどってはいけない。
鯉七②　はい。
大商人　買った人間は喜んだか？
鯉七②　喜びました。
大商人　お前は？
鯉七②　おいらも。
大商人　船頭さんは？
鯉七②　喜んでくれました。
大商人　坊主これが商売というものだ。やってみる気があるか。
鯉七②　うん！
使用人五　と大きくうなずいて。鯉七はその商人の元で働くようになった。

再び市場の賑わい

商人二　数年後のある日、鯉七が市場であの石が売り買いされているところを偶然見かけた。
商人三　これはそうめったに入るもんじゃない。
商人四　ほおー
商人二　そして商談が済んだ後、それをわきで見ていた人に尋ねた。

鯉七②　あの、お教えくださいませんか。一体いくらで売れたのでしょうか？

商人一　あの宝石は金貨百枚で売れた。他の国へもっていけば金貨二百枚でも売るだろうな。

商人二　買った奴は全く運のいいやつだ。

鯉七二　ええ！　金貨二百枚！

ロッキー　この時、鯉七はものを教える教わるというのはこのようなことなのだと学んだ。そして大商人のだんなのことを、それと自分の為に、何度も頭を下げてくれた船乗りのこと、そんなことを見抜いていたおっ母さんことをなぜか思った。こんなことがあって商人の家を後にして鯉七の旅がさらに続いた。これが石っころの話だ。

風が吹き抜ける

てつ　よっしゃー！　ぜんちゃん博多に戻った後は？

ロッキー　ぜんちゃんが博多の実家に戻ってから一年後の一九六五年□丁度アメリカのB52が沖縄を飛び立ち北ベトナムへ爆撃を繰り返していたころ。突然家を飛び出し博多から東京へ。

てつ　何で？

ロッキー　東京駅ホームで拾ったスポーツ新聞の求人欄から、尋ね歩いて江戸川区の一の江で、解体屋に住み込みの臨時作業員として働く。実家とは音信不通。そしてその数年後のある日の夜中、救急センターへ腹痛を訴えるぜんちゃんが運びこまれる。医師や看護師が発症日時や食事内容など聞くが、質問に答えず油汗で痛みに耐えるぜんちゃん。とりあえずレントゲン。

レントゲン・シャッター音

医師　そのフイルムをかざして医師も看護士も。

看護師　ありゃー！

医師　えぇー！

ロッキー　絶句。腸の中にコーラ空きビン一つ。

あさいち　(コーラを噴き出す)ブアー。

ロッキー　その位置から数日を経過と判明。処置を急ぐ。

医師　急げー。

看護師　空びんを腸の中に入れてどうすんだ。

ロッキー　産婦人科で使用する吸引器と鉗子で数時間後やっと取り出す。

看護師　オー。

医師　まずはよかった。
ロッキー　そのまま救急センター併設の病院で保護。カラオケ好きでほとんど何も語らぬ患者を看護師たちは、シャツのタグにマジックで書かれていた善という文字から寡黙のぜんちゃんカラオケぜんちゃんと呼んだ。ぜんちゃん歌います。面影平野。

善助三　（歌・「面影平野」二番）

ロッキー　数日後、病院を抜け出し失踪、ぜんちゃん行方不明。
その他　ええー！
医師　どこへ行った。
看護師　探せー。
医師　何考えてるんだか。
看護師　何か手がかりは。
ロッキー　失踪後残された手荷物から手帳見つかり、九州の親族へ連絡。
医師・看護師　おおー。
ロッキー　九州博多からぜんちゃんのお兄さん秀治さんが上京、これまでのことが明らかに。ぜんちゃんが中国から実家に戻ってから一年後の一九六五年。何気なく風呂の戸を開けたあんちゃん秀治さんが目にしたのは、水の出ている水道ホースを尻に挿入している弟、善助の姿。
けんた　ウソ。
秀治　善助なんばしょっとね！
ロッキー　ぜんちゃんの涙の告白より中国大陸で男主人の相手をさせられていたことを秀治さんは知る。この日、博多から姿を消し音信不通。その昭和四〇年の博多山笠、追い山一位は東流。

善助三　（歌・「博多追い山祝い唄」二番）

ロッキー　さあて三番目の病院も体よく断られたひん死のぜんちゃん。救急車はハンドルを切り替えて四番目の病院へ。三つ目の話は。
善助三　鯉七が坊さんの手を引いて歩くんだ。
ロッキー　大商人のところで人間というものを少し学んだ鯉七は大商人の大きな店に別れをつげ。遠く都からはるか遠い天竺にあるという、白い大きな寺を目指して旅を続ける。荒れはてた大地を進んで、ある日、巡礼中の数人の坊さまと出会う。
鯉七③　坊さま方お願いでございます。

僧一　僧侶になりたい？
鯉七③　どんなことでも学びとうございます。
僧二　われらはあの遠くの山を越えて、誤った信仰をしている者たちへ教本を届けなければならない。
鯉七③　教本？
僧一　教えの書かれた書物だ。約束の期日まで日にちがない。先導する目明きの者が体調を崩して同行できなくなり、どうしたらよいものかと思案の中であった。先導してくれるか。
鯉七③　ですが皆さま方は目が不自由とは思えませんが。
僧二　何事もなければそのままついてくればよい。
鯉七③　あの、誤った信仰とはどのような？
僧一　自分勝手な考え方をするものもいる。それより道々いろいろなことがある。そのたびにここにいる僧侶たちから少しずつ学べばよい。
鯉七③　はい。
僧一　戦やいさかいのあるところを通るときには、それぞれの杖を順に握り目をつぶって歩き通りすぎる。その先頭に立って杖を引けばよい。やってくれるか。
鯉七③　はい、ありがとうございます。そんなことでよければ喜んでやらせていただきます。
僧二　世の中何とかなるものだ。

風が大地を吹く　僧侶に続く鯉七

僧一　何とも石ころや岩だらけの荒れた土地だ。
ロッキー　生まれてこれまで、見たこともないような広大な大地、昼は太陽の強い日差しと熱い風が吹き、夜は冷え々。僧侶たちと荒れて石ころだらけの道なき道を、遠くに高く雪に覆われた山々が連なる、まるで龍の背骨のような山脈を寒さに震えながら超え。野生のらくだや馬、この道はアラビアの方にもつながっているようだ。

戦の歓声
太鼓やラッパの音。

鯉七③　あれはなんでございますか？
僧二　難民の群れだ。
鯉七③　土地を追われ、足を引きずるように大勢の人の群れ。
僧一　どこにでも戦はある。

鯉七③　こんな荒れた岩や石ころだらけのところで、なんの戦でございますか？

僧一　このようなところで難儀な、戦にぶつかるとは。

ロッキー　アリのように大軍が砂漠の中を、砂煙を巻き上げ走りまわってる。互い領土の取り合い。攻めては、火を放って殺し合う。あちこちから炎と煙が。

僧一　おお、泣き叫ぶおんな子供の声が風に乗って。

鯉七③　子供まで、あれではみさかいなしの皆殺し。

僧一　一族の中の者を一人でも生かしておくと、いつかその血筋から恨みを返されると恐れてのこと。恨み末代といってな。

鯉七③　なんと・・・。

ロッキー　ここ辺りでは勝っては負け、負けては勝ちの戦いが何十年と続いている。いさかいの原因など誰も知らない。祀る神様の違いか親の財産相続、兄弟の争いだとも言われたこともあったが、今となってははるか昔のことなので誰も分からない。

鯉七③　巻き添えにあったら大変です。早々に他の安全な道へ。

僧一　ここの道を通っていく。約束の期日までにつかなければならなのでな。

鯉七③　でも、ここは戦場。

僧一　ここを行く。

鯉七③　えっ！

ロッキー　昔からの憎しみが代々引き継がれ、そして殺し合いの末、さらに憎しみが憎しみを生む。ここの戦いもこじれて絡まり、戦ってはにらみ合いの日々が続いていく。

激しくぶつかり戦う兵士の群れ（ダンスバトル）

僧一　通り過ぎるぞ。

それぞれの錫杖を握ると一列になって、それを鯉吉が引く

錫杖の音　風に砂漠の草木が舞う対峙する大勢の兵士

鯉七③　にらみ合っている両軍の真ん中を、列を組んだ坊様たちが目をつぶり杖でつながり、それをおいらが先になって引きながら間を通りすぎる。

二つの群れがぶっかりあったまま停止。

兵士たち間を進む

僧一　風呂など何日も入ったことのない兵士たち。ヒゲは伸び放題で髪の毛はぼさぼさに。
僧二　汗の油と砂が混じりのその顔は黒くまだら模様。
僧一　身に着けているよろいも汗と泥とで薄汚れたまま。
僧二　鼻を曲げるような匂いを放っている。
僧一　そこにいる者たちはその匂いに気づいていない。
鯉七③　大きな刀で盾を打ち、盾がそれを受け止めたその姿のまま、
兵士一　兵士たちの動きがぴたりと止まったまま。
　あっ…

錫杖の音と僧侶の列

僧二　ここいらの国では僧侶はけがれるものを見てはいけないという教えがある。
鯉七③　坊さまはみにくいものを見ないことで心がけがれることを避ける。で、それまでお互いに突撃を繰り返して、血で血を洗うような戦いをしていた両軍の兵士たちは、坊様の列が通りすぎるまでじっとして動かない。

静まり変える戦場

鯉七③　後ろを振り返り坊さまたちを見ると。じっと目をつぶり、引かれるつえをしっかり握り、この世の醜いものを見ないでけがれることなくそこを通り過ぎていく。兵士たちは、刀をぶつけ合ったまま、目だけがじっと坊さまたちのあとを追った。
上官　（舌打ち）
兵士一　誰か、俺の腹の傷口から流れ出ている血を止めてくれ。
上官　しっ！　静かに黙ってろ。

錫杖の音と僧侶の列が通り過ぎる

鯉七③　大勢の兵士が槍と弓矢を構えたまま、じっと息を殺してみている。おいらの手には錫杖があり、草木の生えていない大地をおいらが目となり、僧侶たちがその群れなす兵士たちの中を、その音と共にゆっくりゆっくりと通りすぎていく。
兵士一　誰か、誰か！　…（ガクッと崩れ落ちる）
上官　（舌打ち）また一人欠けちまった。

風が吹き抜ける

ロッキー　これが坊さんの手を引いた鯉七の三つ目の話。コーラビンのぜんちゃん。寡黙のぜんちゃんは体内からコーラのビンを取り出してから数日後、病院を逃げ出し、またしても失踪。その後、ぜんちゃんは山谷他の寄場で日雇い生活を二〇年、一九八八年。ブッシュが大統領にえらばれた年にはホームレスとなる。

けんた　ブッシュと関係が？

ロッキー　ない。

コンクリートの大きなかけらが段ボールにたたきつけられる音

ロッキー　ある寒空の下、段ボールの囲いの中、寒さをしのぐため仲間のトクちゃんと二人で寝ているところを、高校生と中学生らの悪がき共に道路標識の台、コンクリートの塊を叩きつけられ、トクちゃんは耳から血を流し亡くなった。その晩はトクちゃんのいつも口ずさんでいた歌を一晩中歌い続けた。

善助四他　（歌・「赤色エレジー」一番　デモの隊列）

ロッキー　そんないろいろな目に遭った寡黙のぜんちゃん。四番目の病院も断られ。

善助四　今度はハチが飛ぶんだ。

ハルミ　何が？

善助四　ハチだよ。ハチ。

ハルミ　ブンブン飛んでる蜜を集めるハチかい？

善助四　レンガ工の話だ。

ロッキー　鯉七の話を続ける。大勢が戦っている戦場を坊さんたちの手を引いて歩き切った鯉七は、その坊さんたちに別れを告げ数年後。旅の途中のある日、食い物を得るためにレンガ造りを手伝うことになった。広大な大地に長い長い大きな壁が作られる。強い日差し。数えきれないほどの土工やレンガ工が作業。マキが燃やされ煙が立ち上がり、四角い土が焼かれる。

強い日差し。

数えきれないほどの土工やレンガ工が作業。音が響く

薪が燃やされ煙が立ち昇り、土が焼かれる音　作業に精を出す

鯉七

レンガ工　泥を練っては天日ぼしで乾かし、レンガを作っては積み上げ

ていたが、何しろとんでもない量なので、天日ぼしでは間に合わなくなりそこいら中に生えている木々を切り倒してはレンガを焼いて間に合わせた。多くの木々が切られ、国中に何日も何年も煙は立ち上り、太陽の光を遮り、少しずつ気候さえも狂いだした。さらに今までに見たこともないような竜巻や日照り、ところによっては大雨と嵐が吹き荒れ、崖崩れまで引き起こした。

鯉七④　あと少しで今日の作業分は終わる。

レンガ工　鯉七はこれまで数えたレンガと、その日の仕事量を間違えたことは無かった。その日、万里の長城建設現場の監督役人視察の日も、自信に満ちた表情の鯉七は時間までの最後の一つを積み上げようとした。

鯉七④　ちぇっ！　うるせいハチだ。

レンガ工　汗に羽音を立て寄ってくる虫を、コネ土を塗りこめているヘラをそのままに、レンガを持つ手でたたきつぶそうとした。

鯉七④　あっ！

レンガ工　今までこんなことは無かったのに、ほんの弾みの出来事。レンガはいとも簡単に粉々に割れてしまい。慌てた鯉七はとりあえず、壊れたレンガにカタチの近い石を探して、最後の一つとしてレンガとレンガの間にさし入れようとした。

鯉七④　何やってんだか。二度手間だ代わりに石をはめ込んでおくか。あれっどうしたことだ。

レンガ工　僅かなでっぱりではまらず、それでもそれを無理やり押し込もうとする。間もなく監督官が到着の声が聞こえる。

鯉七④　何でこんな日に限って、ちくしょう。この石さえはまってくれれば、何とかならねえのか。同じ大きさならここに納まって完成するってのに。何で…

レンガ工　あと少しでその日の自分の担当箇所がすんで、小屋に帰ってゆっくりできるのに、この石のおかげで親方や仲間からは怒鳴れらなければならない。そのときさっきの蜂が又しても飛んできたので、首に巻いていた汗ぬぐいのボロ布で叩き落とした。

鯉七④　うっとうしいな。ほれっ。

レンガ工　すると蜂は地面に落ちて身動きしなくなり、悔し紛れに踏みつぶした。

鯉七④　こいつめ！　お前が…

レンガ工　と言ったまま鯉七は固まったようになって、じっと蜂の死骸を見つめたまま動かなくなってしまった。

鯉七④　…

レンガ工　みんなと同じように仕事を覚え、叱られながらレンガを積み上げてきた。そして月からも見えるに違いない皇帝の力の証しとなる偉業のために働いてきた。

鯉七④　蜂が、蜂がおっ死んでしまった。蜂は蜜を集めているだけで何の罪もないのに。突然おいらのぼろ布に叩き落されて…。

レンガ工　それからどれほど時間が経ったやら。夕暮れてあたりが暗くなっても、動かずじっとして蜂の死骸を見つめている鯉七を見て、親方が怒鳴る声が響く。始めは聞こえていたようだが、仲間の声共々鯉七の耳には入ってこない。夕焼けに真っ赤に染まった空、風が遙地平線より吹いてくるその中で、いつまでもいつまでも蜂の死骸を見つめている鯉七。一晩か二晩か、数日のうち別のハチにでも刺されてでもしたのか我に返ると、その場を後にして更に旅を続けた。

風が吹き抜ける

ハルミ　レンガ工とハチの話はここまで。トクちゃんのために歌ったぜんちゃんは？

ロッキー　仲間のトクちゃんを失ったのが一九八八年。それからは空のアルミ缶集めと花見の場所取りなどで小銭を貯め、賞味期限切れで捨てられたコンビニ弁当などでなんとか食つなぐ。数年後のジングルベルの音楽が流れるクリスマスの夜、自転車を盗み東京から八日間掛けて下関、門司トンネルを通り博多の実家へ向かう。

善助五がジングルベルを口ずさみながら自転車に

ロッキー　やっと博多についたのは正月三が日の朝、天神の須崎公園の公衆トイレ。安全カミソリで鼻歌交じりで頭をきれいにそり上げ。

善助五　（歌・「月の砂漠」二番　髪をそり上げながら歌う）

ロッキー　安全カミソリで頭をきれいにそり上げ。坊主頭のぜんちゃんは那珂川の那の津大橋を渡り古森病院裏、神屋町の実家へと向かう。

けんた　なつかしいもんだ。実家へ戻れる奴がうらやましいや。

ロッキー　しかしそこにすでに家はなく駐車場に。

けんた　駐車場に。あるんだそんなことが。

ロッキー　三軒隣の駄菓子屋の話では、すでに兄の秀治は亡くなり、その家族もどこかへ転居、ひび割れた駐車場のアスファルトから雑草が、枯れたぺんぺん草が冷たい風に揺れていた。

けんた　案の定、五つ目の病院もダメで。六つ目の病院へ向かう。ぜんちゃんがこう言った。

善助五　石工が彫るんだ横向きに、横向きのゾウ。

けんた　鼻の長いゾウが横向き？

ロッキー　六つ目の病院へ向かう。その後の鯉七。レンガでできた長い大きな壁に別れを告げて旅を続けた、そして今度は大おきな寺院を建てている工事現場で、ある年老いたえらい坊さまに出会った。

大寺院の工事現場。大勢の職人がのみを振るう音がやかましく響く

鯉七⑤　お願いでございます。お教えを受けとうございます。

老僧　なんのために。

鯉七⑤　勉強してえらい坊さまになるのでございます。

老僧　そうか（笑い）何事も修行、石工の作業をしてみろ。

鯉七⑤　石工？　のみと金づちですか？

老僧　いやか？

鯉七⑤　いいえ、やります。やります。

石工一　工事現場の小屋に飾られている図面を見て鯉七はびっくりした。その寺院の外の壁面には、裸の男女が絡み合う姿、その男女の姿が無数に描かれ。それを正面向きの立派なゾウが大きな鼻をかざした姿で、数多く並んで支えているのが描かれている。

石工二　ゾウが？

鯉七⑤　なんだこれは…

老僧　お前にも父と母がいるだろう。男と女で子が生まれ、それが繰り返してこの人の世は続いてきた。

石工二　なるほど。

老僧　生命の不思議として男女のつながりはたたえられている。

石工二　納得だ。

鯉七⑤　男女のつながり？

老僧　（薄く笑い）その内にわかる。それまで待て。

鯉七⑤　はい…

老僧　この世界はなんによって支えられているのか知っているか？

鯉七⑤　支えられている、この世界がですか？

老僧　お前が今立っているこの大地のことだ。
鯉七⑤　（周りを見回す）えっ？…
老僧　この世界はゾウによって支えられている。
鯉七⑤　ええ！（石工たちが顔を見合わせ）
老僧　寺院の壁面に男女のあらゆる姿が何千と彫られ、それを正面向きの多くの立派なゾウが大きな鼻をかざした姿で彫られるのだ。
鯉七⑤　字の読めないものでも一目で教えが分かるように。
へえ…

大勢がのみを振るう音が響く

老僧　鯉七。
石工一　数か月が過ぎたころ。
鯉七⑤　えっ？　私でございますか？
老僧　なんて暑い日だ。どうだ少しは悟りを開いたか？
鯉七⑤　（汗をふきふき腰をかがめて近づきかしずく）いえ…。
老僧　頼みがある。今お前が彫っているところのあのゾウのことだが。
鯉七⑤　はい？
老僧　横向きに左のほうに首を向けて彫ってくれるか。
鯉七⑤　はい！？（その場所を見上げ）あそこの…
老僧　その左を向いたゾウがその先に、一体の男と女の楽しくからむ姿を見ることになる。そこを見て思わずゾウが笑う顔にしてくれるか。
鯉七⑤　今彫っている、あの一頭だけでございますか？
老僧　お前さんが今彫りかけているあれだ。今彫っている隅のゾウだけでよい。
鯉七⑤　はい…
老僧　では頼んだぞ。（付き人の僧侶を引き連れて去る）
鯉七⑤　あの…
石工二　工事中のここでは位の一番高いお方だ。
鯉七⑤　冗談でからかったのか。でも付き人の僧侶をつれていたし。
石工二　そのとき、夕暮れでみんな作業場から引き揚げ、そこには居残りの鯉七だけしかいない。
鯉七⑤　何かを間違われているのかもしれない。もう一度お目にかかって確かめさせていただくしかない。明日になったらもっとはっきりする。明日まで待とう。
石工二　と、その日はまんじりともせず眠れぬ夜を過ごし、あくる日

またそこを通りかかった老僧に尋ねた。

老僧の前

鯉七⑤　ご無礼と知りつつ、もう一度確かめさせてください。
老僧　なんだ。
鯉七⑤　私の彫っているあそこのゾウのことでございます。
老僧　うむ。
鯉七⑤　横向きにしてその先に見るのは、男女の姿。それをにこりと笑うゾウ。まちがいございませんでしょうか？
老僧　それが？
鯉七⑤　はい、間違いございませんでしょうか？
老僧　その通り、間違いない。頼んだぞ。
石工二　鯉七にはどうしても信じられない。こんな話は誰にも信じてもらえっこない。老僧の周りにはお付の方々もいたので、改めて間違いはないようだ。そして高く高く積み上げた僧院の石に何百頭ものゾウの正面向きに並ぶ列の中に一頭だけ、それを言われるままに横向きに彫った。

石を彫る音
国の王が通りかかり

王　そこの石工。
鯉七⑤　（慌てて王の前）これは王様お恐れ多いことでございます。
王　あそこのゾウを彫っているのを見た。あのゾウを担当して彫ったのはそちだな？
鯉七⑤　はい、老僧さまのお言いつけでございます。老僧さまに仰せつかりました。私が彫っていたあの一頭。それを横向きに。その目の先に男女のあの姿。ゾウの目は笑うということでございます。
王　！　…
石工二　その厳格な王さまには可憐な一人のお姫さまがいた。
姫　なぜ工事中の寺院へ行ってはいけないの。
王　女子供の立ち入ることは禁止だ。姫とて同様。立ち入りは許さぬ。
石工二　王は宮殿に戻ると老僧を呼び出し。
王　ゾウのことだが。
老僧　何か？
王　みなが一様にまっすぐに正面を向いているのに、何百体の中

の一頭だけなぜ横向きなのか？

老僧　私が彫れと命じました。

王　神の教え、それを形にするというからこれまで誰も見たことのないような、あのような広大な土地に見上げるような大きな寺院を建て、多くの腕のいい石工を国中から呼び集め彫らせている。

老僧　はい。

王　寺院の正面でなく裏側の隅の方とはいえ、わしの目がごまかせると思ってのことか。そちの教えに従わないものを、その存在を自ら認めるということではないのか。どのような料簡なのだ。

老僧　あれが私どもの教えです。

王　ぐるっと何百頭ものゾウが正面を向いて整然と並んでいるのに、一頭だけ横を向いて笑っている。しかも笑顔で男と女のなすことを眺めている。

老僧　はい。

石工二　何を聞いてもそれ以上のことは一言も言わず黙したまま。厳格な王にはその答えがわからない。しかし王である以上は、わからない知らないことは許されないものと思い工事はそのまま続き、大きな寺院は彫刻に彩られ完成をした。引き渡しの盛大な催し物が開かれる。

民の歓声とどよめき

老僧　王様、完成いたしました。

王　見よ、民はどよめきひそひそ話をしているではないか。

老僧　完成でございます。

石工二　多くの大臣たちの反対を押し切り、王の権威で成した仕事。

王　どこが完成なのだ。あれの一体どこが完成したというのだ。

石工二　従う僧侶たちも戸惑っていた。

王　わしが指摘した横向きのゾウはそのままではないか。

老僧　…

王　これが教えのカタチか？

老僧　はい。

王　そうか、よく申した。よいか、このことに関して三日の内にその考えを民に向かって示すことができなければ、邪教として命はないものと心得よ。

王・老僧　離れ去る

石工二　その日の夜、これを聞いていた姫さまが、若い僧侶と共にその寺院を王に内緒で見に行った。

姫がカギの管理をしている若僧に命じる
驚き躊躇し、しぶしぶ従い現場のカギを開ける
中に入る二人、しばらく大きな壁面を見上げていたが

姫・若い僧　ああ！　…

石工二　多くの彫られた男女の姿を見て、二人は息をのんだまま凍り付いてしまった。その日のうちに王の目を盗み、姫と若い僧は手に手を取って、二人は馬に股がり城をそっと抜け出した。

石工一　大変だ。逃げ出した！

馬のいななき
馬に乗り逃げる姫と若僧

王　なに！　身分違いを恐れぬ若ぼうずめ、八つ裂きにしてくれる。老僧の首をはねよ！　追っ手を放せ！

兵士①　多くの馬が威勢よく後を追う
兵士②　離れ離れにならぬよう紐で二頭をつなぎ、峠の道を行く
兵士①　尾根で立ち止まり、道を確かめる
兵士②　姫は二度と戻れぬ国を振り返る
兵士①　馬の蹴った小石に飛び上がる鳥の声
兵士②　羽音に驚く馬は後ろ足で立ち上がり
兵士①　二頭の馬は姫と僧侶を乗せたまま谷底へ
兵士②　長く悲鳴がこだまする
兵士①　姫と若い僧侶を乗せたまま谷底深く落ちて二度と戻ることはなかった。

老僧　鯉七。命じられたままと言って許されるものではない。すぐにげろ。

鯉七⑤　大僧侶さま！

兵士②　老僧の首ははねられ。

民の驚き悲しむどよめき

ロッキー　残った王が我に返ったときには王の跡継ぎはいなくなってしまっていた。[illegible]の後国は滅び、なぜか寺院だけは残りの横向きのゾウもそのまま残り、それから先のことは誰も知らない

ということだ。

風が吹き抜ける

ロッキー　これが横向きのゾウのはなし。
けんた　ぺんぺん草を見つめたぜんちゃん。
ロッキー　九州の実家を訪ねたぜんちゃん。博多の実家は跡形もなくなり、ひび割れた駐車場のアスファルトに枯れたぺんぺん草が冷たい風に揺れている。行く宛てを失った寡黙のぜんちゃん、近くの交番へ出頭。
警官　これ？…　盗んだ？　東京？
善助六　（うなだれる）…
警官　あんたなんばしょっとね。
ロッキー　自転車と所持金一二〇円と共に自首。
警官　なんか言ったらどげんね？
ロッキー　尋ねる警察官に何も答えず。
警官　黙っとったら何もわからんでしょ。
ロッキー　ただ涙を流し続けていた。歌います。

善助六他　（歌・「浪速恋しぐれ」一番）

ロッキー　六つ目も断られ。次はここから大分離れているけどそこなら確実のようだからと、七つ目の病院へ向う頃は大分呼吸が怪しくなっていた。
善助六　それでも話し続けた。おばあさんと針刺しの話。
てつ　針刺し？
ロッキー　縫物をするときの針、その針を刺す小さな座布団のようなものだ。それからの鯉七。横向きのゾウの後、何年もかかって砂漠や龍の背のようにはるかに連なる山々を越え、雨風嵐、寒さに耐えて。巡礼の道々に身を投げ出し、ただただ神に祈り、身に着けた衣服はすでにぼろぼろに擦り切れ、手にした分厚い手の下駄は振り切れ、何足も作り変えた。その引き換えに、身の穢れを振り払いひたすら悟りを求めた。更に数年が過ぎたある日、鯉七が水を求めて井戸のある村へ立ち寄る。

井戸のそば、石仏の周りを村人らがどかしたり掘ったりして探し物。

村人①　（ボロボロの紙切れを手に）ここいらに違いねえ、絶対に。

村人②　まさか井戸の中ということはないな。水をかい出すということなら大ごとだぞ。
村人③　人は何を隠してるかほかの人間にはわからねえ。誰よりも早く。
村人④　あっ！
他の者　ええー
村人⑤　見つけたか！
村人④　壊れたかめだ。何も入ってねえ。
村人⑥　脅かすねえ。
村人①　おお良いところに坊様。実は坊さま、ここのおばあさんが数年前に亡くなった。もしお心があれば経を挙げてやってはくださらないかね。
鯉七⑥　私などでよければ。
村人④　あんたこれをどうみるね？
鯉七⑥　はい？
村人④　ここいらの地図だと思うんだがどうだね？
鯉七⑥　地図？
村人④　ここが川筋でここの穴のところを線でつなぐと井戸のところにたどり着く。
鯉七⑥　はあ…どうでしょう。
村人⑥　おめえはあっちさ行ってろ。一つおらのを見てどうだい？
鯉七⑥　おっとのぞくんじゃねえ！
村人⑤　いいじゃねえか。ばあさんが残した宝がある所だと思うがどうだい。
鯉七⑥　宝？
村人⑤　亡くなったばあさんがよこした針刺しの中から出てきたものだ。けどぼろぼろで何が書いてあったか誰もわからねえ。
村人⑥　宝物のありかに違いねえ。その地図だ。
鯉七⑥　宝物を残したのですか？
村人⑥　それは…それ…あれっ？　誰だかが宝の場所の地図…あれっ？
村人①　おらじゃねえ。
村人②　おらでもねえ。
村人③　いんや。
村人④　違うって。
村人⑥　じゃ誰なんで！
村人⑤　そんな話があっという間に広がって。この騒ぎ。
鯉七⑥　亡くなられた方は、おばあさんとおっしゃってましたが？
村人④　ここいらではみんなに好かれていて、村で評判の穏やかな心

の優しいおばあちゃん。
村人①　草花にやさしく微笑みかけるような人。
村人②　村の衆から古切れをもらってそれを縫って小さな針刺しを配ってね。
村人③　野良着の古い切れ端やら。人のお役に立てるのがうれしいって。
村人⑤　一銭にもならないのに、少し手間賃なりといただいても良くないかいって言ったこともあるんだよ。
村人①　いらないって。きれいな針刺し、もらったものがみんな喜んで。
村人②　とても重宝してさ。そんな穏やかな時も過ぎて、歳もとり亡くなってしまった。
村人③　その日は、鳥の声もお別れの歌を歌っているようでね。
鯉七⑥　そうでしたか。（手を合わせようと）
村人④　あんたがお経をあげてくださるなら。話してもいいかもしれない。
鯉七⑥　はい？
村人①　実はね。ここのおばあさんに娘さんが一人いるんだけどね。
鯉七⑥　はい。
村人④　わからないもんだね。ここを出て向こうの山一つ越えたところで、女房持ちの男の人とできちゃって。おばあさんは一人で深く大きく溜息をついて空を見上げて、小さな背中を丸めてね。
鯉七⑥　そんなことが…
村人③　みんなは知っていたけど、おばあさんの前では話さなかった。だって不憫でさ。
村人②　その男が何かあれば酒だ食い物だとみんなにふるまってたからね。
鯉七⑥　つらかったでしょうね。
村人①　でさ、おばあさんが亡くなってだいぶ経ってのある日。針刺しも古くなっておばあさんのことを誰もが忘れたころ。ほつれができるようになったので何気なく破れたところをつくろうとしたんだ。
鯉七⑥　ええ…
村人②　その中から小さくたたんだ紙切れが出てきて、何やらが書いてあるんだ。
鯉七⑥　それがこの紙？
村人⑤　多くの針に刺されて穴だらけになってそれが何だかは分からないんだ。近所のみんなに見せたんだけどわからなくて。そ

のうち他の家でもほつれを繕おうとして中を開けてみると同じようなものが出てきた。穴だらけのぼろぼろ、やっぱり何だか分らなかった。

村人⑥　ひょっとすると何か宝物でも隠していて、それの隠し地図じゃねえかって誰かが言いだして。

村人⑤　おらじゃねえって。

村人⑥　坊さまはどう思うね？

村人らが差し出すボロボロの紙切れを何気なく重ねて、陽にすかしてみる。

鯉七⑥　あっ…。これはひょっとして人じゃないですか？

村人ら　え？

鯉七⑥　重ねて、こうやって。（日にかざしてすかす）

村人ら　ええっー？

鯉七⑥　（更にかさね）それも男の人ではないでしょうか？

村人ら　えっー！？

村人⑤　じゃ。この紙に書いてあるのは男の絵で、じゃ何、毎日のようにみんなが針で刺していた？　でブスブスのボロボロ。

村人ら　うそだー！

鯉七が神の束を差し出す　引き下がる村人

鯉七が墓石に紙を添え手を合わせる。固まる村人ら

風が吹き抜ける

ロッキー　六つ目の話はおしまい。更に数年後、ぜんちゃんは軽い認知症で徘徊、保護。アメリカの原子力空母の出入りが見える丘に建つ、横須賀の施設に収容。

善助七　（歌・「港町ブルース」四番）

ロッキー　カラオケの順番のいざこざでそこを飛び出し、川崎の多摩川に架かる橋の下、段ボールの中で寝ているところを悪ガキどもの投げた火炎瓶で、火だるまになったぜんちゃん。みんなで火を消し止め、救急車で運ばれた。でもホームレスゆえに病院で受け付けてもらえず。

けんた　七つ目の病院で受け付け担当と救急隊員がやり取りしているうちぜんちゃんがいきなり。

善助七　やっと龍になれるんだ！　鯉七が龍に！

けんた　鯉七が龍になったのかい。ぜんちゃん、ぜんちゃん！。鯉七のエピローグ。（僧①へ）　風に吹きさらされ雪をいただく龍の背のような形をした山脈を超え天竺の寺院に着くと、道々覚えたことばで、読み書くことを学び、薄暗い通路にうずたかく山積みにされた経典を、寝食も忘れて読み通し、より高い身分の僧に問い、答えを求めては念仏を唱え、雨、風、日照の中、山に籠もりバター油のともし火で数珠を握り締めてひたすら祈った。

袈裟をつけた玄新が荒野を風にあおられながら歩む
強い日差しにさらされて歩む

僧①　その後修行を重ね、鯉七は名も玄新と改め行者姿で、さらにインドまで足を伸ばして教えを乞う旅をした。

鯉七の周りをチベット問答の僧侶の群れ

僧侶たち　母の胎内にありし己は！
玄新　ただただ白き無！
僧①　その旅の先ざきの地で多くの人に学び。洪水を収める治水の方法や病気治療の薬草の処方、風水やら茶の栽培など、その他万巻の経典を読み、書き写し日本へ持ち帰った。世話になった船頭もすでに亡くなっていた。そして身に着けた多くの知識で、大きな川の氾濫を防ぎ井戸やため池など多くの事に役に立てた。

ゴマが焚かれ、多くの読経と共に祈る玄新
宮廷

宮廷医①　その頃、帝の母殿が何年もふさぎ込み部屋から一歩も出ずという病いで困っていた。玄新ことを耳にした帝が玄新を呼びつけ。
帝　この数年というもの母が気がめいるといって、この病どうじゃ？
宮廷医②　母親のつねを思ったにちがいねえ。
玄新　海の向こうより持ち帰った薬草がございます。
帝　おお。で？
玄新　インドより持ち帰ったこの薬草をゴマの中に混ぜ、焚いて部屋中を煙で満たします。

帝　あいや分かった。玄新以外の者、何人たりとも立ち入り禁ず。

帝の母の笑い声

宮廷医①　数日後、あれほどふさぎ込んで部屋に閉じこもっていた帝の母御が楽しそうに笑い声。

帝　宮廷のお抱え医師もお手挙げだった病を見事。褒美として寺と領地をあたえる。民の為に尽くせ。

宮廷医①　喜んだ帝は玄新に大きな寺を立て、たくさんの褒美を与えた。玄新は多くの弟子を抱えるようになり、民も玄新の周りに集まるようになった。

更にゴマが焚かれ読経も大きく響く

民一　人もうらやむほどの地位に昇りつめた。

その他　おおー

民二　すると帝は自分の地位が脅かされるのではないかと怯え。

その他　おおー

玄新　私が邪教とのうわさ？　誰が？　帝が？

民三　あることないこでっち上げ。

玄新　この寺に放火して濡衣を？　私を処刑！　ええ！

民三　玄新は着の身着のまま屋敷を飛び出す。

民四　大勢の兵士の山狩りの声とほら貝、太鼓の音が響きわたる。

民二　山を抜け、馬に追われ河原の葦で傷つきながらも逃げ惑う。

馬の群れが追う

民三　あぶりだすために河原に火が放たれる。

民四　捕らえられて丸太に縛りつけられる玄新。

丸太に括られる玄新

民四　力尽き捕らえられた玄新は、河原ではりつけの丸太に縛られ火あぶり。うずたかく積まれた足元の葦の束に火がつけられ炎が勢いよく舞い上がり、川面を赤く染める。玄新は苦しい中　真っ赤な炎に包まれながら空を見上げ。

鯉七⑦　なんなんだこれは。ああ！…

民五　赤く染めあがる炎に見たのは。

鯉七⑦　滝だ。滝の中にいる。
民五　なんと舞い上がる炎がまるで滝のようだ。玄新の手がひれとなり鯉の姿に変わっていく、鯉に。そして見る見る間に自分の姿が鯉になり、その滝の中を勢いよく泳ぎながら登り昇っていく。
鯉七⑦　ああ、鯉になっている。鯉の姿に！
民五　そして鯉の姿は龍に姿を変えてさらに空高くと昇っていく。
鯉七⑦　鯉のおいらが龍になって天に昇っていく。おいらが龍に。龍だ！
民五　玄新になった鯉七。炎に包まれてその一瞬。自分の求めてきたものを見た。
鯉七⑦　龍だ！　龍になれた！

滝の音からカミナリへ
燃える炎の音から救急車のサイレンへ

けんた　七つ目の病院に着いたときはまだ息があった。しかしやり取りを待つ間にこと切れて帰らぬ人となった。美形のぜんちゃん、寡黙のぜんちゃん、歌うは再び「無法松の一生」（口笛）いいぞぜんちゃん！　日本一！

善助七　（舞、歌う・「無法松の一生」二番）

河原の水音。
焚火の炎にあおられて、ホームレスたちが軽いのりで楽しそうに踊りながら歌う。

俺たちみんな　宿無しホームレス
寝床もなければ　仕事もない
ネオン瞬く　都会の片隅で
体を丸めて　耐えるのさ

財布は空っけつ　腹も空っぽ
家もなければ　家族もない

美形のぜんちゃん　寡黙のぜんちゃん
ぜんちゃんの　夢もの語り
美形のぜんちゃん　カラオケぜんちゃん

ぜんちゃんの　夢もの語り

幕